

平成 20 年度入試の出題意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

外国語学部	・・・・・・・・・・	P 1
経済学部	・・・・・・・・・・	P 5
文学部	・・・・・・・・・・	P 7
法学部	・・・・・・・・・・	P11
国際環境工学部	・・・・・・・・・・	P13

推薦入試

外国語学部	・・・・・・・・・・	P27
経済学部	・・・・・・・・・・	P28
文学部	・・・・・・・・・・	P29
法学部	・・・・・・・・・・	P32
国際環境工学部	・・・・・・・・・・	P33

平成 20 年度入試の出題意図、採点総評 《一般選抜》

● 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

英米学科では、国際社会で生き抜くフロンティア精神を持った学生、英文読解力やリスニング力などバランスの取れた英語運用能力を備えた学生、また英語圏の文化や社会に対する幅広い知識を備えた学生を求めている。試験では特に英語の実用的運用能力をみる。高等学校卒業程度の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力、英語リスニング能力を判定する。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

2つの実験の関連性（最初の実験で2つのグループに分けて、次の実験で各々のグループの反応を見る）をきちんと把握できていない解答がかなり見られた。

問題 2

内容を理解していれば出やすい解答なので、理解力の差がはっきりと出た。

問題 3

高い評価を得た受験生は自然にストレートに答えることができたが、語彙不足、英語の言い回しになれていない受験生がかなり苦労した。注目点の一つは「二十代の女性」というフレーズで、最も堪能な訳"women in their twenties"を書いた受験生がほんの僅かであり、半分程度が"women between 20 and 29"と表現したが、レベルの低い受験生は上記のフレーズを一切英訳しなかった。

問題 4

自然科学(natural science)、情報技術(information technology)などの用語を正しく英語にできていないものも多くあったが、概ねよくできていた。時制の面で問題がある答案が目立った。

問題 5

かなりよい得点ができていた。

● 外国語学部英米学科 後期日程（小論文・英語リスニング）

<出題の意図・ねらい>

問題 1

問 1 寿司のグローバルゼーションに関して、2冊の著書からの見解が述べられている。内容が分散して述べられているため、要点をつないで述べる力が要求される。また、主張したい部分を見極める力も必要である。

問 2 最近では、卑近なことばになったグローバルゼーションという概念であるが、かなり広くあいまいに使われている。本文の内容を踏まえた上でのグローバルゼーションを具体的な形で自分の意見として述べられるかを問う。また当然、400字という余り長くない文章ではあるが、その中で、論の展開がきちんとなされているかどうかも見るとも見る。

問題 2 リスニング

従来と同じ形式であるが、次の点を狙いとしている。第1部は会話の流れをフォローできているか。第2部では一人の発話がかかなり長い部分があるので、最後まで聞き取れているか。第3部では、第2言語習得に関する少し専門的な内容であるため、聞き取った内容を理解できているか。

<答案の特徴と傾向>

問題 1

問 1 英文要約の部分

趣旨を踏まえて訳した答案と、それを外した訳とで差が出てしまった。中心となるキーワードを捉えると日本語でまとめる時に、的確な答案内容ができると思う。

問 2 あなたの意見の部分

具体的な事例を出して論じて欲しかったが、抽象的な論じ方がほとんどであった。また流通としての国際化という概念が捉えきれないようである。

問題 2 リスニング

かなり高得点の解答も見られたが、いつもの傾向として得点にばらつきが見られる。

● 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

中国語習得を志す志望者が温家宝中国首相の訪日に関して、今後の日中関係を展望した文章を読み、その内容を的確に要約することを第一に問うた。要約は文章読解力と文章表現力を考查するための出題である。第二問で、本文の要約をふまえ、日中関係について自らどのような意見を持ち、それを定められた字数内で展開できるか否か、その内容の説得性、文章表現力を考查しようとした。中国語を学ぼうとする学生に対して、我が国と中国との現状や未来について、幅広く関心を持ってほしいという意図もあり、問題文を選定した。

<答案の特徴と傾向>

問 1

課題文の内容がやや総花的であったため、受験生は 400 字以内で要約することに苦心惨憺したようであった。従って課題文の冒頭部分に記された温家宝首相の「氷を砕く旅」「氷を溶かす旅」という発言や筆者の「戦略的互惠関係」という象徴的表現に引き付けられ、日中関係の在り方について具体的に述べた答案はほとんどなかった。但し中国経済のファンダメンタルは只今のところ非常に好調で、中国人の多くも、権威主義体制に様々な問題が内包されていると認識しつつ、実際には現状維持を望んでいる。そして筆者も中国が民主化すべきだと述べるに止まり、中国人の総意が奈辺に存在するのか語っていない。そのため、多くの答案が抽象的な言葉の羅列に陥ったものと分析される。

問 2

問 2 は問 1 の要約をふまえ、日本と中国との関係について受験者自身の考えを述べてもらう問題であったが、的外れな解答、客観的な根拠の提示されていない、または誤った根拠をもとに論を展開している解答が少なからず見られた。中国学科を志望するのであれば、日常の日中関係に関する話題にも敏感であるはずで、受験生にとっては問 1 よりも問 2 のほうが易しいのではないかと採点者側は考えていたが、問 1 でうまく問題文が要約できていないことも影響してか、期待したほどよく書けている答案はなかった。

● 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

設問一・二では、それぞれ資料一・二において筆者が主張した内容を的確に読み取れているかを、設問三では、資料全体を踏まえて自分なりの見解を展開できるかを問うた。

各資料は力点の置き方こそ違え、いずれも現代世界における国家の問題を取り上げている。その論旨は総じて同心円状の関係にあり、設問に正しく答えるためには、個々の資料だけではなく全体を通じた議論の方向性を把握する必要がある。内容的には必ずしも平易な文章ではないが、抽象的な論理や学術用語にもひるまず自分の言葉で要約し、そこから導き出される現代国家のありようへの批判・提言などを具体的かつ論理的に叙述するために必要な総合的能力を見るというねらいで、各問題を設定した。

<答案の特徴と傾向>

設問一

導入として「文化」概念にまつわる問題を指摘し、それを考える手がかりとしての「世界システム論」、およびその下での主権国家のありようについて適切に説明されていれば、おおむね正解となる。それぞれの論点についての説明は比較的よくできていたが、全体として筆者の考えを十分に咀嚼し、自らの言葉で論理的に要約できている解答は必ずしも多くはなかった。

設問二

資料中の「ピノキオ問題」と「国家の過剰」に関する説明的な言及が不可欠である。そのうえで、日本の現状を含め現代の国家の抱える問題に関する筆者の主張が適切に要約されていれば、おおむね正解となる。比較的よくできた解答が多かったが、中には両語句の説明だけに紙幅を用い、筆者の主張を十分に読み取れていないものがあつた。

設問三

近代世界が支配関係を組み込んだ構造を持ち、特にグローバル化の進展に伴い様々な問題が発生するようになったという現状認識が資料一と資料二の内容から提示される。その問題は主権国家の現状に投影され、それぞれの固有の文脈で表面化しているが、資料二と三にあるように、それに対する対応もまた歴史的・社会的な背景を有している。以上を踏まえ、国家に関する解答者の見解が具体的かつ論理的に導き出されていれば、その内容に応じて得点が与えられることになる。解答には格差問題や教育問題などを取り上げて論述するものが見られたが、国家のありように関する見解が求められているにもかかわらず、そこまで行き着かずに終わっている例があつた。また、解答者自身を取り上げた具体例に論点を横滑りさせ、設問にはほとんど答えていないものも散見された。さらに、国家のありように関する見解は述べられていても、論理性を欠く叙述も目立った。

● 経済学部 前期日程 (英語・数学)

<出題の意図・ねらい>

(英語)

英語能力を総合的に問う内容を出題した。問題構成は長文3問で、1問目と3問目は読解力を見る問題をベースに、さらに、基本的な英文和訳の能力、文の構造を理解する能力を見る問題を出題した。2問目は①標準的レベルの構文の解釈力、語彙力、文脈の類推力をみる。②パラグラフの展開の特徴を把握し設問に対する解答を見つけ出せるか。③夫婦、家族を通して男性のあるべき姿を読み取る読解力をみる。

(数学)

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

<答案の特徴と傾向>

(英語)

ここ数年の答案の傾向として、日本語の誤字・脱字が多いことが挙げられる。本年の答案でも、漢字の間違いが多く、減点の対象となった。

1問目と2問目は、まずまずの出来で、基本的な単語の知識を得ていることが伺えた。

3問目は、文章の大意を理解していない答案が多かった。そのため、英文和訳などでは、意味不明の訳文となっているものが見うけられた。出題文の大意をおおよそ読み取ることが何よりも大切であり、そのためには、日頃から新聞やニュースに触れて、一般常識を身につける必要がある。

(数学)

問題1

小問(1)と(2)は多くの人ができている。小問(3)は単に円の面積を足すのではなく、共通部分の面積を減じなければならないが、これに気づいた人が少なかった。扇形の面積は(積分を用いずとも)中心角を求めることによって計算できるが、これに気づいた人も少なかった。正確にグラフを描いて問題を捉える練習をしていれば容易に解けるので、日ごろからの図解の習慣が有用です。

問題2

小問(1)は、微分の基本的概念である極限の意味と微分の基本的概念についての問題でしたが、予想外にも不正解の答案が多かったと思います。小問(2)については、多くの受験生が極値の求める方法を理解し相対的によくできていました。しかし、小問(3)(4)の答案については、図形的な応用力の不足という印象が強く、全体的にも、基礎概念について正確に理解しない受験生が多かったと思います。応用力を養うためには、まず、数学的基礎概念を正確に理解することからはじめることが大事です。

問題3

三角比を用いた図形の基本的な表現が十分に身につけていない受験生が多く目立った。特に、直線が円に接する条件を十分に理解できていない答案が多かった。また、三角関数の基本的な公式を用いた計算では、計算ミスが目立ち基礎的な計算練習を十分に行っておくことが必要です。三角関数や直線や曲線などについては、関数表現とグラフとの関係を十分に理解するように日ごろから図形的な感覚を養っておくことも大事です。

問題4

2次方程式の判別式を用いて解の存在する確率を求める問題でした。小問(1)は良くできていました。小問(2)～(4)はあまりよくなかったです。小問(2)(3)は、基本的に判別式

の符号条件を満たす組み合わせを探せばよいだけですが、(2)に関しては、 $b=0$ の場合を数えていない解答や2次方程式なので2次の係数が0でないこと前提ですが、 $a=0$ の場合を数えてしまっている解答が多かったです。小問(3)は小問(2)の解答を利用するため間違える人が多かったです。また、小問(2)の解答分(つまり、重根を持つ場合)を足すのを忘れていた解答も少なからずありました。小問(4)は、小問(3)の解答に1次方程式の解を加える問題でした。この点に気づいた人は多かったのですが、組み合わせに間違いが多く、正解者は少なかったです。また、判別式自体を間違えている人や判別式の符号を間違えている解答もありました。

● 経済学部 後期日程 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

課題文における著者の意見を踏まえて、自らの考えを整理し説得的に表現する能力を測ることを意図した。

そのため、課題文にはものの考え方に関する比較的平易なものを選んだ。理系的、文系的という整理は単純であり、著者の考え方を理解することは容易であろう。

設問1と2では、文章を正確に読み取り、適切に要約することができるかどうかをみた。

設問3では、自分の考えを述べることができるか、著者の意見を踏まえたものになっているか、そして、全体として論理的で説得力のある文章を書くことができるか、これらの諸点をみた。

<答案の特徴と傾向>

設問1および設問2については、いずれのも大半の受験者が題意をほぼ正確に捉えて解答をしていた。ただし、1文が長く内容が理解しにくいなど文章表現上の問題がある答案が少なからずあった。

設問3では、課題文の著者のやや強引な理系人、文系人の規定を様々に相対化するような議論が展開されることを期待していたが、残念ながらそのような答案はほとんど見られなかった。

多くの解答が、著者の規定をそのまま受け入れ、自分がいかに理系人(もしくは文系人)であるかを述べていたり、ものを考えるときに理系的発想が重要であるという著者の意見に対して賛成(もしくは反対)の立場を表明する議論にとどまっていた。そのためか、「理系人は要領がよく不真面目である」といった無理な一般化が議論の中に入り込んでいるものが散見された。

また、自分自身の受験勉強の体験など個人的な経験からいきなり理系人(もしくは文系人)一般についての結論を導いている答案も多く見られた。もちろん、論述中に個人的な経験を述べることも場合によっては有効であるが、読者を説得することが期待される論文という文章スタイルにおいては、客観性と論理性こそが何よりも重要であるということを改めて確認してもらいたい。

● 文学部比較文化学科 前期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

【問題Ⅰ】

学生にとって身近な話題でもある読書のあり方、とりわけ速読に対する問題提起を扱った内容の文章を出題した。全体的には英語の読解力を問うための設問であるが、各設問の具体的なねらいは以下の通りである。

- 問1 【読み取り問題】下線部が具体的にどの部分を指しているのかを読み取る設問。
問2 【記号選択穴埋め問題】空欄の前後の英文をしっかりと理解した上で、適切な英単語を選ばせる設問。
問3 【英文和訳】関係副詞節や関係代名詞節をはじめとする様々な要素を含む長文の構造がしっかりと把握できるかどうかを問う設問。
問4 【記号選択穴埋め問題】空欄の前後の英文をしっかりと理解した上で、適切な接続詞を選ばせる設問。
問5 【英文和訳】いくつかの慣用表現の理解を問うた設問。
問6 【記号選択穴埋め問題】英文の理解力を問う設問。
問7 【読み取り問題】下線部が具体的に何を指しているのかを読み取る設問。比喩的な表現の理解も問うた。
問8 【記号選択穴埋め問題】英文の理解と慣用句の理解を問うた設問。
問9 【英文和訳】英文の直訳だけでなく、前の英文の理解ができているかどうかを問うた設問。
問10 【タイトル選択問題】英文全体の理解ができているかを問う、タイトル選びの設問。

【問題Ⅱ】

英語の語彙力、慣用表現の理解、英文構成能力、英文法に関する習熟度を総合的に問うための和文英訳の設問。和文は詩を選んだが、詩の技法的なものまで英訳に反映できているかどうかを問うのではなく、詩の内容がこなれた分かりやすい英文に訳されているかどうかを問うた設問。

【問題Ⅲ】

文化によるコミュニケーション・スタイルの違いを主題とする文章を出題した。目には見えない文化の違いをスタイルごとに説明した文章から、筆者の考えを正確に読み取ることができるか、また紹介された説を把握した上で、異文化間でのコミュニケーションの問題点を論理的に説明できるかを試す問題を出題している。全体として文を読解する能力、応用的な思考力、理解した事柄を正確に表現できる文章力を問うている。例年どおり、語彙力や漢字力も試している。

問一 [書きとり・読みとり]

高校「現代文」までに習得した漢字力を試した。

問二 [記述式問題]

文意を正確に読み取り、筆者の論理を正しく把握できるかを試した。

問三 [記号選択問題]

コミュニケーション・スタイルを具体的に説明する文をヒントとして、その要約を正しく表現するのに必要な語彙が選べるかを試した。

問四 [書き抜き問題]

指定された語彙とほぼ同義の表現を、文中から選択できるかを試した。

問五 [記述式問題]

筆者が提示したホールの説を把握し、それを応用して冒頭のコミュニケーション・ギャップの理由を説明する文章が書けるかを試した。

問六 [記号選択問題]

前後の文章が示す人間関係を正確に示す表現を選択できるかを試した。

問七 [記号選択問題]

あまり日常的ではない語彙の同義語を選択できるかを試した。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1 内容理解は大体できていたが、*War and Peace* の書名訳に地の文と区別するための括弧(例えば『』)を付けていないものがかかり見受けられた。

問2 正答率は低い。

問3 英文和訳の正解率は3割。誤字が目立つ。英語の語彙不足も目立つ。最低限必須の単語を覚える必要があるそう。

問4 正答率は5割強。

問5 “appreciate” を文脈に沿って適切に訳せていない答案が目立った。

問6 正答率は5割弱。

問7 情報があふれかえっている=多すぎる、という ocean の比喩的意味がつかめていない例が目立った。

問8 正答率は1割弱。

問9 個々の単語の意味は正確に把握できていながら、日本語として不自然な訳となっている解答が目立った。The same の意味を正確に把握できていない解答も多かった。“being swallowed” の箇所が受動態であることを見抜けなかったり、“swallowed” の意味を間違えたりした答案も目立った。

問10 正答率は9割を超えていた。目だった誤答は2であった。

問題Ⅱ

詩的な表現ができているかどうかは問わず、詩の内容が理解でき、それを分かりやすい英語で表現できているかを見たが、基本的な文法事項(三単元のsなど)や英単語(例えば bird, different など)のスペルミスがめだった。

問題Ⅲ

問1 多い誤答は③「基範」④「脱脚」⑤「部所」であった。同音であっても意味が通じないものを、なんとなく書いておいた、という印象。満点に近い者と半分程度の得点しかない者との二極分化。

問2 螺旋的コミュニケーション、飛び石的コミュニケーション、高コンテクスト文化という3つの要点を押さえた解答であるかどうか得点の分かれ目となった。誤字も若干目立った。

問3 ほとんどが正解。選択肢の数は多いが、平易。

問4 正解率は比較的高かったが、「集団主義的思考」と解答すべきところを「集団主義的思考と行動」とした解答も目立った。

問5 正解率が極めて低かった。ハック氏の出身国バングラディシュは、日本と同じように「高コンテクスト文化」圏であるが、「低コンテクスト文化」と誤解し、「高コンテクスト文化」同士であっても、文化が異なれば相互理解が困難であることが理解できていない解答が目立った。

問6 正解率は高かったが、「イ」や「エ」という誤答も目立った。

問7 「イ」という誤答が目立った。正解率はやや低い。

● 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【問題Ⅰ】

問1および問2

自然環境の保護に関するエッセイの論点を規定の字数内に要約させることで、受験生の英文読解力、英語語彙力、日本語の文章力を問うた。

問3

筆者が提起した問題に対して受験生に英語で自分の意見を書かせることにより、受験生の英語語彙力、英文法の習熟度、英文構成能力、論理的に自分の意見を述べる能力を問うた。

【問題Ⅱ】

「文明」と「文化」の違いについて論じる文章を出題した。

問1では、問題文の中で論じられる「文明」と「文化」の違いに関する筆者の主張を正確に読み取ったうえで、自分自身のこれまでの勉強や体験をもとに適切に説明できるかを試した。

問2では、「文明」と「文化」の違いに関する筆者の論に対して、自分自身の見解を述べる設問である。筆者の論を踏まえつつ自身の考えを論理的に説明できる思考力と、制限された字数内で説得力ある文章をまとめる能力を評価することをねらいとしている。

<答案の特徴と傾向>

【問題Ⅰ】

問1

象の頭数を人為的に調整する、という点はつかめていても、公園の収容能力の範囲内に収まるように、という目的の部分については、触れていないか間違っている解答が半数以上に上った。

問2

- ① 相対立する立場の意見がきちんと述べられていない解答や、英文を読み間違っている解答が目立った。
- ② 解答に含めるべき内容が欠落している解答が目立った。また、簡単な漢字の誤字や、日本語として不自然な解答も目に付いた。

問3

(a)と(b)の意見の違いを明確にしていないもの、「英語で」という設問であるにもかかわらず日本語で書いてあるものなど、設問の指示に従っていないものが予想以上に多かった。また、中学校程度の基本的な文法事項の間違いも多かった。

【問題Ⅱ】

問1

文明と文化のベクトルの違う例として、学校をあげている解答が多かった。その際、文明社会における教育制度と個別文化社会における学校の特徴の違いを、文化・文明のベクトルの相違として丁寧に述べている解答例は少なかった。このほか、言語と個別言語、住居一般と個別建築様式、食べることと文化毎の食材・調理法の違い、漢字に対して平仮名・カタカナ、通貨制度に対して流通通貨の違いを具体例としてあげていた。こうした例も、文明と文化のベクトルの違いとしての説明は乏しかった。

また文明と文化はその性質や方向性が異なるという発想そのものがなく、質問の意図を理解していないと思われる答案も見られた。

問2

文明と文化に関する筆者の論旨を充分理解しないまま議論を展開している答案が多かった。

● 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

自然環境や社会構造などで変化していく「こどものあそび環境」を考察し、これからのあそび環境について論じる。

<答案の特徴と傾向>

設問1

説明部分の訳の出来・不出来と共に、あそびの質について理解できているか、意義について考慮しているかが点数の基準となった。

多くの答案が訳でつまづいている様であった。

設問2

下線が「このこと」だけでなく、「このこと～すぎない」まで引かれている事を踏まえて記述することが望まれる。

設問3

文章1の二つの概念について述べてある答案が少なかった。

「あそびの大切さ」や「あそびの減少」の実態ばかりが述べられ、解決について、しっかり記しているものは少なかった。特に具体的な取り組みまで書かれてある答案は極めて少なかった。

● 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

<出題の意図・ねらい>

自分自身の見解をテーマに沿って論理的・独創的に表現できる能力、また集団の中で適切なかたちでリーダーシップを発揮していける能力を有する人材の選抜を行う。

なお、討論テーマはあくまでも討論のために設定されたもので、それ以上の意図をもつものではない。

<受験生の特徴と傾向>

全体を通して、ある程度活発な議論が展開されたが、社会的背景との関連で議論されることが少なかった。中にはテーマの本質的な話しと外れてしまったグループも見受けられた。

● 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

出題文の出典は、浜辺陽一郎『コンプライアンスの考え方 信頼される企業経営のために』（中公新書、2005年）である。

「コンプライアンス」という言葉は聞きなれない受験生がいるかもしれないが、企業による偽装表示や商品製造過程における管理の問題などに関して連日のように報道で取り上げられており、社会の中で企業がどのようにあるべきかについて考える機会は多かったと思われる。その意味において、企業の「法令遵守」が現代日本において大きな問題となっていることは認識されているであろう。しかし、著者によれば近年日本においても使用され、企業も重視し始めている「コンプライアンス」は、単に政府レベルで制定された法令を遵守することのみを指すものではなく、企業活動の倫理的側面や社会的責任などを含めた、企業の行動規範や業務基準も対象としているものである。そこには、企業が社会の中に存在している組織であることをふまえた上で、独自の社内ルールを制定することや、消費者からの信頼を失わない経営を行う必要性が存在している。また、「コンプライアンス」は、単に上から与えられたルールを遵守するだけでなく、それに加えて、どういうルールを設定していくか、またどのようにルールを運用していくかが、企業において重要な課題であることを示すものである。

「コンプライアンス」という言葉を用いる背景には、企業が法令を遵守することは当然であるが、既存の法律を守るだけで社会の中での企業の活動は十分であるかという問題意識があると考えられる。現代の日本においては、企業が法律を遵守することが最重要の課題であるといえるが、従業員のモラルの向上や経営陣の危機管理能力、企業の社会に対する責任についても、今後十分に考えていく必要がある。

本設問は、「コンプライアンス」についての筆者の説明を読み、筆者の見解をふまえた上で、受験生自身が企業の社会での活動がどのようであるべきだと考えるか問うものである。

<答案の特徴と傾向>

設問は、「筆者の説明をふまえた上で」、自らの考えを述べることを要求していた。しかしながら、答案のなかには、筆者の見解をきちんと理解することができず、それとは無関係に一方的に、近年の企業の不祥事に関するニュースについて論じるのみに終始しているものも散見された。

もちろん、筆者の見解をきちんと理解したうえで論述している答案も、少なからずあったことは言うまでもない。とはいうものの、筆者が文中で提示している論点を繰り返すにとどまるような答案が、比較的多く見られたことも事実である。その意味では、企業が社会でどのように活動すべきかについて、自分自身の考えと筆者の考えとを、きちんと意識的に分けつつ論じた答案は、出題者が期待したほど多くはみられなかった。本来は、そうした論述を要求した問題であったことは、言うまでもない。

ただし、数はそれほど多いというわけではないものの、自分なりの考えをきちんと論述した答案もあった。筆者の見解をふまえたうえで、それに加えて、例えば、内部告発や情報公開、地域の問題などといった論点を提示しつつ、独自の観点から論述した答案も、実際に見られた。そうした答案が、比較的高い評価を得たことはいうまでもない。しかし、そうした答案が示している論点も、あらかじめ出題者の側で予想できる範囲内のものにとどまるものではあった。

また、それほど多くはないものの、筆者の見解を批判するという立場の答案もみられた。どのような立場の答案であれ、筆者の見解をふまえた上で根拠を明示して自己の見解を十分に展開している答案には、高い評価を与えるという方針で採点に臨んだが、実際には、筆者の見解を根拠を示しつつ批判することに成功しているといえるような答案は、残念ながらあまりみられなかった。

全体としては、飛び抜けた独自の見解を示す答案は少なく、筆者の見解を最近の事件に則して

繰り返すにとどまるか、筆者の見解を軸にして、それに若干の論点を加えることにより、そつなくまとめた答案が多かったとすることができる。

● 法学部 後期日程（面接）

<出題の意図・ねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を実施している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、目的意識や社会的問題関心などを問うことにより、勉学への意欲と幅広い素養を持った学生を選抜するためである。

したがって、面接にあたっては、①受験生の入学意欲や入学後の抱負などを含む志望動機、②法学部学生として必要とされる社会的問題関心と一般的知識および論理的思考能力、③質問に対する回答の際のプレゼンテーションやコミュニケーションの能力などを重視している。

<受験生の特徴と傾向>

面接試験では3問が出題された。第1問目は、受験生に面接試験開始前に記入してもらったエントリー・シートの内容に関連した問題で、本学法学部の法律学科あるいは政策科学科を志望した理由について問うものであった。本問については、受験生の側でもあらかじめ予測していたようであり、そつなく答える受験生が多かった。とはいえ、その大半は、大学案内等に記載された内容を暗記し、棒読み的に答えるものであったことは否めなかった。

他の2問は、受験生の社会的問題関心、論理的思考力と表現力などの適性をみるための、社会問題に関する質問であった。ひとつは「高齢化」問題についてであり、もうひとつは「未成年者の喫煙防止」についての問題であった。

第2問目の「高齢化」問題については、受験生やその家族にとっても比較的身近な問題であり、ある程度答えやすい問題ではないかと予想していたにもかかわらず、実際には受験生は回答に詰まり、面接担当教員のいわゆる「助け船」を必要とするようなケースが多く見られた。比較的多かった回答としては、少子化や年金の問題と絡めたものが多かった。

それとは対照的に、第3問目の「未成年者の喫煙防止」についての問題は、受験日の前頃にマスコミで報道されたことが多かったこともあり、比較的多くの受験生が、ある程度の内容を伴う回答をしていた。特に、導入について多くの報道がなされていた「成人識別 IC カード (taspo)」制度に絡めて答える受験生が多く見られた。

最後に、面接の態度等について言えば、面接の際に緊張してうまく話をするのができなかった受験生と、そうでない学生との差は大きかった。うまく話をするのができない受験生については、追加質問をすることなどにより、受験生の回答を極力引き出すよう配慮したが、それでも考えをうまく表現することができない受験生もおり、受験生間の得点差につながった。

● 国際環境工学部 前期日程（理科・英語・数学）

・理科

<出題の意図・ねらい>

第1問～第3問 物理

第1問

万有引力の法則、および、万有引力を受けて運動する物体の円運動、力学的エネルギーなどの理解度を問う。

第2問

理想気体の状態方程式や内部エネルギー、気体が外部にする仕事、熱力学の第1法則などの理解度を問う。

第3問

問1から問3の3問とも、重要な基礎法則に関する理解度を問う問題。

問1：無限に長い導線に流れる電流が一定値である場合、導線からある距離に置かれたコイルを横切る磁束密度を問い、直線電流がつくる磁場の理解度を見る問題。

問2：無限に長い導線に流れる電流が時間によって変化した場合、導線からある距離に置かれたコイルに流れる電流とその方向を問い、ファラデーの電磁誘導の法則の理解度を見る問題。

問3：平行電流が及ぼしあう力を問い、フレミングの左手の法則の理解度を見る問題。

第4問～第6問 化学

第4問

いずれも環境に深くかかわりのある「化学」から出題し、「化学」の社会的意義の理解を目的としたきわめて基礎的な問題とした。

問1：食糧問題の解決に資する「アンモニア合成技術と化学肥料」の基礎を確認する。

問2：化石燃料の燃焼によるCO₂の発生に関する基礎を確認する。

問3：発電というエネルギー変換の現場での大気環境保全にからめて「化学量論」の理解を確認する。

問4：炭素数1、ほかは酸素と水素という極めてシンプルな化合物で、化学全体の理解度を問う。

第5問

問1：酢酸とエタノールのエステル化反応で平衡式に関する一般的な用語について理解を確認する問題

問2：平衡に関する理解を計算過程を含めて確認する問題。

第6問

問1：有機化合物の構造と反応について、一般的な知識を評価

問2：有機工業で従来より、基本的なフェノールの合成過程についての知識を評価

問3：高分子合成の知識及びボイルーシャルルの法則あるいは理想気体の状態方程式の知識と理解度を評価

<答案の特徴と傾向>

第1問～第3問 物理

第1問

万有引力の法則の問題、および、万有引力の法則を用いて重力加速度を求める基礎問題の正答率は高かったが、力学の総合的理解を必要とする応用問題の正答率はやや低かった。力学的エネルギーについては、物体の運動エネルギーを問う問題の正答率は高く、位置エネルギーを問う問題の正答率は低かった。

第2問

理想気体の状態方程式の理解度を問う問題と気体が外部にする仕事についての解答率は高かった。しかし、気体に加えられた熱量や気体が外部に放出する熱量に関する問題、気体の内部エネルギーの増加についての問題の正解率は低かった。

第3問

教科書に記載されている電流・磁界・磁束の時間変化と誘導起電力の関連の理解度を見る基礎的な問題であったが、正解率の平均は50%を下回った。

問1：(ツ) (テ) とともに30%程度の正解率であった。

問2：(ナ) (ニ) は60%程度の正解率であったが、(ト) (ヌ) の正解率は10%程度であった。

問3：(ネ) は60%程度の正解率であった。

第4問～第6問 化学

第4問

問1：解けていない答案があったが、おおむね良くできていた。

問2：解けていない答案があったが、おおむね良くできていた。

問3：「化学量論」は非常に良く理解されていた。

問4：化学全体の理解力には欠ける解答が多かった。また問題をよく読まずに化学式だけを記述している答案が多かった。

第5問

問1：エステル化反応であることが答えられていない答案が散見された。

また、問題全体を把握せずに最初に「酸化還元反応」と書いてしまい、後半の空欄を埋められない答案もいくつかあった。

反応生成物を正確に記述できていない答案も比較的多かった。

問2：計算式の一部が問題文中に示されているにもかかわらず、水の存在を無視する答案が目立った。

立式ができている答案のほとんどが正解であったが、計算が正しく終わっているにもかかわらず生成元物質の濃度にわざわざ変換して間違えている答案も数枚あった。注意力の向上が望まれる。

第6問

問1：化学反応は理解しているが、命名法にあいまいな者が目立った。

問2：有機化学工業での反応であるが、意外と理解していた。

問3：気体の状態方程式は覚えているが、モル数に関係することを理解できていなかった。

また、計算や単位等初歩的な誤りも多かった。ほとんどできない者がかなりいた。

・英語

<出題の意図・ねらい>

第1問

1. 標準的レベルの構文の解釈力、語彙力、文脈の類推力をみる。
2. パラグラフの展開の特徴を把握し設問に対する解答を見つけ出せるか。
3. 夫婦、家族を通して男性のあるべき姿を読み取る読解力をみる。

第2問

読解力を見る問題をベースに、さらに、基本的な英文和訳の能力、文の構造を理解する能力を見る問題を出題した。

<答案の特徴と傾向>

第1問

標準的な語彙と構文力を試した問題である。男性の社会的文化的に期待される役割とそれが崩された場合に耐える葛藤と解決法を心理学的な立場から述べたエッセーである。随所に解答のヒントとなる簡単な表現がでてきているにもかかわらず、受験生の多くが問題文及びその直前の文だけで解答を得ようとしている。近年特に目立っている点として、語彙力の不足と長文問題の文脈理解及びメッセージを汲み取ろうとする姿勢の欠落である。強引で勝手な解釈を羅列するだけの独りよがりの解答が多い（loss of a child を「少子化」、we face some kind of emotional upheaval を「我々の顔は激変し」）。また漢字の誤り（怒る→恐る？ 努る？、心配→心酸？、方法→法方？、多くの→大くの？）解答に使用する日本語の口語化（感じれるから…、見つけれずに…、こける、キャラなど）など採点に苦慮する解答が多数見受けられた。

問1：同義語の問題であるが、grief を知らない受験生が多いのに驚かされた。Tears, weakness など周辺的な解答が目だった。

問2：下線2の前だけでなく「結果」を示している後ろの部分に注目すべきで、dangerous という結果を導き出す原因は何かを考えれば2, 3行目や5, 6行目では不十分であることがわかる。

問3：husband という語を知っていればすぐ答えられたはずであるが、テーマとは食い違った解答になっている受験生が多かった。

問4：wrong を「心配する」do with を「行動する」count を「数をかぞえる」などの誤答が多く、セミコロンの用法と “, so find a way…” を命令文での解釈ができていなかった。

全体的に受験生が2極化しており、全くアカデミックな文語の解釈を練習していない受験生が多くなってきている。自分の既知語のイメージだけで構文を取らずに場当たりの答案が目立った。解釈の基本的な練習と語彙の増加、日本語としての意味形成のための言い換えの練習が必要であろう。

第2問

昨年度までとはかなり異なった傾向の長文読解問題である。内容的には、少子高齢化が進むわが国において、外国人労働者への依存率が必然的に高まってきていること、および日本国内に在住する外国人労働者の抱える言語・文化面その他の問題をジャーナリストの立場から論じている。英字新聞から生の記事を問題文に取り上げているために、使用語彙の範囲が幅広く、高校生の学習レベルを超えている部分も見受けられるので、前後の文脈から類推しながら意味を読み取る能力が求められる。

問1：構文的には比較的単純であるが、助動詞 could, may のもつ婉曲的な意味機能をどのように日本語で表現するか、four out of ten や by the middle of this century など定型的な英語表現に対応した日本語の言い回しを想起できるかがポイントであったが、正確に訳出

できていた答案は3割以下であった。受験生個々の理解度の差がかなり大きく、解答にも如実に反映していた印象がある。上記の箇所の他、supportを「介護する」意味に解釈したり、people of working ageを「若者」と決めつけた解答が目立った。

問2：日本に居住する外国人の数の少なさを述べるにとどまり、アメリカやイギリスの状況との比較にまでは及んでいない答案が散見された。

問3：単純な構文の和訳であったためか、全体としては正しく訳せている答案が多かったが、細部に着目すると、“can be”の部分を適切に訳出できていない答案が目立った。

問4：“mixed success”の意味が十分に理解されていなかったためと思われるが、問われていることとはまったく関係のないことを述べているものが多かった。

問5：最後のパラグラフをまとめれば正解が得られる問題である。比較的正答率が高かった。解答できなかった受験者は、基本的な語彙力が不足していたものと思われる。

・ 数学

<出題の意図・ねらい>

第1問：2次関数、確率、数と式、数列、三角関数に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

第2問：数学Ⅱ、数学Bの基礎力を確認する問題で、次の内容を出題。2次方程式の解、円と直線、三角関数、指数関数、数列の和。

第3問：微分法と積分法に関する問題。導関数の基礎を理解しているか、回転体の体積の解法を理解しているかを問う。

第4問：空間のベクトルに関する基礎問題で、位置ベクトル、ベクトルの内積、ベクトル方程式の理解を確認する。

<答案の特徴と傾向>

第1問：基本的な問題であり、いずれの問題も正解率が高かった。問題ごとに比較すれば、確率を計算する問題(4)の正解率がやや低かった。

第2問：問題全体の正解率は予想より低かった。時間不足が一因と考える。

(1) サ、シ、ともに正解率はきわめて低かった。

(2) 正解率はやや低かった。y軸に平行な接線のみ正しく答えている答案が多かった。

(3) 正解率は低かった。 $\cos(x+y)$ の値は正しく答えているが、 x 、 y の値を間違っている答案が多かった。

(4) 正解率が高かった。最小値の計算ミスが散見された。

(5) 正解率が高かった。 S_n の値の計算ミスが目立った。

第3問

(1) 正解率が高かった。

(2) 関数の増減、変曲点の意味を理解していない解答が見受けられた。

(3) 回転体の体積の解法の正解率が高かったが、部分積分、置換積分の計算ができていない解答が多数見受けられた。

第4問：問題全体の正解率は予想より高かった。多くの答案で、ベクトルの基礎は理解できていることが確認できた。

(1) 満点の答案が多かったが、不注意な誤答案も散見された。

(2) 正解率が高かった。線分EFの長さの計算ミスが目立った。

(3) 正解率は低かった。Gが点O、E、Fを含む平面上にあること、または、Gが線分CD上にあること、を正しく記述できている答案はよくみられたが、正解に至っている答案は少なかった。

● 国際環境工学部 後期日程（英語）学部共通問題

<出題の意図・ねらい>

第1問

- 問1：代名詞の指示対象が同一文中になく、先行文脈の中にある場合、正しく指摘して訳出することができるかどうかを見る。
- 問2：不定詞の形容詞的な用法を理解したうえで、主格補語の位置に立つ別の不定詞句をそれぞれ訳し分けることができるかどうかを見る。
- 問3：daily choices の内容が後続文脈の from … to … に該当することを正しく認識して説明できるかどうかを見る。
- 問4：問1と同じく、代名詞の指示内容を先行文脈の中から正しく見いだすことができるかどうかを問う。

第2問

- 問1：構造的にやや複雑な文を理解して適切に訳す力があるか否かを見る。
- 問2：文章全体を理解した上で、質問に該当する箇所を正しく捉え日本語でまとめることが出来るか否かを見る。
- 問3：文章全体を理解した上で、質問に該当する箇所を正しく捉え日本語でまとめることが出来るか否かを見る。
- 問4：構造的にやや複雑な文を理解して適切に訳す力があるか否かを見る。

第3問

- 比較的平易な日本語の文を正確に英語に訳す力があるか否かを見る。
特に、使用語彙が適切で、文法・語法の誤りが少ない英文を書けるか否かを見る。

<答案の特徴と傾向>

第1問

昨年度同様、環境問題を取り扱った文章からの出題である。地球温暖化の深刻化に対する個人の意識改革をテーマとしているが、さほど専門的な内容ではなく、語彙も高校で学習する範囲を超えるものはわずかで、比較的平易な文章となっている。にもかかわらず、和訳と内容説明の各問とも全般に正解率が低く、英語の語彙力低下とともに、日本語による表現力が著しく低下していることを伺わせる答案が多数見られた。

- 問1：代名詞の指示内容を問うと同時に、条件節の解釈を見る問題であるが、it の指示内容が先行文脈の中にあることを正しく把握している答案は半数以下であった。また、only if を「～して初めて」ではなく if only 「～するだけで」の意味に解釈した答案が多かった。また、crisis, resolve というキーワードの意味が理解できている受験生が3割に満たないことから、語彙力の低下が裏付けられた。
- 問2：特に目立ったのは、make a difference（変化を起こす）という成句の解釈で、単に「違いを作る」「相違を生じる」などとした答案が8割以上であった。それ以外では、the way we live our lives（生活様式）の解釈が正しくできていない答案や global を「地球の」ではなく「社会の」と解釈している答案が各々全体の3割以上と目立っていた。
- 問3：そもそも daily choices（日々の選択）が何と何を比較・選択の対象としているかを全く説明していない答案が大部分で、本文中に述べられていない事例を挙げているものも相当数見受けられた。直後の from ～ to ～の内容を簡潔にまとめて書くだけでよい設問であるが、出題意図を読み取れていない受験生が多かったのではないと思われる。
- 問4：この設問は、同一文中の主語(number)が指示対象であり、比較的容易に解答できたようで

あった（前文中の emissions は複数名詞で先行詞にはなりえないが、単数形の emission という解答であれば文脈的には可）。ただし、「文中の英語」と指定しているにもかかわらず、日本語で解答しているものが少なからずあった。設問の指示に注意を払っておれば防げる典型的な careless mistake である。

第2問

問1：audience を「聴衆」、see を「わかる」、understand を「感じる」、mourning を「朝」など前後関係を見逃した訳出が多く見られた。また character が何を表しているのかが理解できていないのは着物のデザインを観察する機会がないためと類推できる。若物（若者）、精確（正確）、観集（観衆）、特徴（特徴）、希重な（貴重な）など誤字も多く日本語を読む書く、という基本的作業の不足が窺える。また will, is mourning という動詞時制を見逃し過去形で書いてある答案が多いのには驚いた。中学時の基本に立ち返っての復習が必要と思われる。

問2：本文3ページの中盤に回答があるのだが、2行目の遠因の部分を書いている受験生が多かった。問題は「着物作りの後継者のいなくなった理由」を聞いているわけで直接の最も関連性の強い部分を回答すべきである。確かに出題単語の中には難度の高いものも含まれていること、現在完了時制の使用が多く文脈展開において時間的な遡及が多いことは否めないが、作者はテキスト全体で何を強調しようとしているのかを汲み取る態度が薄いことは残念である。

問3：本文中の、どこが正解に該当する箇所かを理解していながら、Western や granddaughter といった基本的な語彙を訳し間違えていると思われる答案が、相当数見られた。

問4：so...that... 構文を正しく理解していないために、でてきたと思われる誤答が、相当数見られた。また、resist の意味を理解していないものも、かなり多かった。全体的に、答えの日本語訳が日本語と言えない意味不明なものが、多かったように思われる。

第3問

文としての正しさを意識せず、ただ単に英単語を並べただけのような答案が散見された。「大きな開きが出てくる」の部分で “make a big difference” といった表現を使って訳した答案は、ほとんどなく、gap, open, opening といった語を使って不自然な英文を作っている例が多かった。最後の「他人の心を理解することは、人生でなにより大切なことであるはずである。」の部分は、いわゆる it~that 構文を用いて、完全とまではいえなくとも正確に訳している答案が多く見られた。

● 国際環境工学部エネルギー循環化学科 後期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学A，数学Bの基礎力を確認する問題で、次の内容を出題。2次関数のグラフ，対数関数の不等式，定積分，反復試行の確率，空間内の一直線上の3点。

第2問（化学）

有機化合物の物質量および分子式の求め方、ならびに特定の化学反応から予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第3問 選択問題A (化学)

密閉系での酸素と水素の燃焼反応を事例として、一般化学の知識ならびに気体の性質について答えさせる問題である。

第3問 選択問題B (物理・化学)

硫酸銅溶液の電気分解を事例として、電極反応で生じる様々な化学反応(金属析出、気体発生)について説明させ、生成物の物質量を求めさせる。次に生成する気体をさらに反応させた場合、どのような現象が起きるか、グラフを用いて定量的に考察させる問題である。

第3問 選択問題C (物理)

物体の直線運動や音のうなりなどの理解度を問う。

第3問 選択問題D (生物)

DNAが遺伝子の実態であるという周知の事実が解明されるきっかけとなった実験を題材として、実験内容を科学的に正しく解釈する力を試す意図で作題した。知識を問うというより、目的とした結論に到達するためには、どのような実験を行い、どのような結果が得られればよいか、といった科学的思考の過程を正しく理解し、これを的確に記述できるかどうかを問う問題である。

第3問 選択問題E (化学・生物)

鎖式炭化水素の反応と、生成物が生体の中でどのように作用をするかについて基本的な理解力を問う複合問題である。

問1：鎖式炭化水素の反応に関する基本的な問題。

問2,3：基礎的な化学反応式が完成できるかを問う問題。

問4,5：嫌気呼吸の意味を理解し、得られたエタノール量からグルコース量が算出できるかを計算させる問題。

問6,7：植物ホルモンの基礎的な作用について理解できているかを問う問題。

<答案の特徴と傾向>

第1問 (数学)

基本的な問題であるため、全般的に正答率が高い。(1)の放物線の移動の問題に関しては、平行移動しただけの答案(y軸に関する対称移動をしていない)が多数見受けられた。小問別では、(2)の正答率が最も低かった。

第2問 (化学)

問1：単純な計算ミスと考えられる解答が幾つか見られたが、正解率は比較的高かった。

問2：解答が不足している答案が多く見られ、正解率は問1と比較して低かった。

問3：構造を正確に記述できていない答案が多く見られ、問2と比較して正解率が低かった。

問4：正解率は高かった。しかし、反応に関しては理解をしているものの、用語を正しく使用することが出来ていない解答が多く見られた。

第3問 選択問題A (化学)

1 計算間違いや有効数字間違いなど、単純な間違いが多かった。

(第3問の問3)

2 知識を問う問題や定型的な問題の正解率は高かった。

(問1のイ, ウ, エなど)

3 応用問題, ちょっとひねった問題の正解率は, 非常に低かった

(第3問の問1のカ, 及び問4)

第3問 選択問題B (物理・化学)

基礎的知識を駆使できる力を確認する問題であったので、知識を体系化して利用できる能力を有している受験生にとっては、難しくなかったようである。

その中で、陽極と陰極を取り違えたり、単純な割り算で小数点を打ち間違えたり、電荷の数を合わせていない反応式というようなケアレスミスが目立った。

また、時間変化を問う問題では学校での化学実験の際の観察経験に基づく思考力が効いたと思える。

第3問 選択問題C (物理)

物体の直線運動の基本的理解を問う基礎問題の正答率は高かったが、走行距離、所要時間等を問う応用問題の正答率はやや低かった。物体運動の計算問題の正答率は高かったが、音のうなりを問う問題の正答率は低かった。

第3問 選択問題D (生物)

問1は基本知識を問う問題で正解率が高かった。問2～5は記述式であったため、最初の問いには正解でも、その理由の説明にこの分野の内容を理解していないと思われる回答が目立ち、正解率が低かった。

第3問 選択問題E (化学・生物)

簡単な有機化合物の反応経路について出題をしたが、完答していた受験生はほとんどいなかった。また問2では化学反応式をきちんと立てることができない受験生が目立ち、また問4の量論関係からグルコース量を求める問題についても正答率は低かった。植物ホルモンの作用については概ね正答していた。

● 国際環境工学部機械システム工学科 後期日程 (総合問題)

<出題の意図・ねらい>

第1問 (数学)

数学Ⅰ, 数学Ⅱ, 数学A, 数学Bの基礎力を確認する問題で、次の内容を出題。2次関数のグラフ, 対数関数の不等式, 定積分, 反復試行の確率, 空間内の一直線上の3点。

第2問 (化学)

有機化合物の物質量および分子式の求め方、ならびに特定の化学反応から予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第3問 (物理)

斜面上をすべる物体の運動とエネルギー、および、物体系の運動量保存の法則などの理解度を問う。

第4問 (数学・物理)

前半は、相加平均と相乗平均の大小関係を用いて、分数関数の最大値・最小値を問う基礎問題。後半は、電池、抵抗、コンデンサーからなる回路の電流、電圧などを問う基礎問題で、とくに、静電エネルギーの最大値を求めるために、前半の結果を応用できるかを確認する。

第5問 (物理・化学)

硫酸銅溶液の電気分解を事例として、電極反応で生じる様々な化学反応(金属析出、気体発生)について説明させ、生成物の物質量を求めさせる。次に生成する気体をさらに反応させた場合、どのような現象が起きるか、グラフを用いて定量的に考察させる問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問 (数学)

基本的な問題であるため、全般的に正答率が高い。(1)の放物線の移動の問題に関しては、平行移動しただけの答案(y軸に関する対称移動をしていない)が多数見受けられた。小問別では、(2)の正答率が最も低かった。

第2問 (化学)

問1：単純な計算ミスと考えられる解答が幾つか見られたが、正解率は比較的高かった。

問2：解答が不足している答案が多く見られ、正解率は問1と比較して低かった。

問3：構造を正確に記述できていない答案が多く見られ、問2と比較して正解率が低かった。

問4：正解率は高かった。しかし、反応に関しては理解をしているものの、用語を正しく使用することが出来ていない解答が多く見られた。

第3問 (物理)

斜面上をすべる物体の運動を問う問題の基礎事項を問う問題の正答率が高かった。運動エネルギーの基本問題の正答率が高かったが、応用問題の正答率は低かった。物体系の運動量保存の法則の基本的理解を問う問題の正答率が高かったが、物体の衝突後の運動を問う応用問題の正答率は低かった。

第4問 (数学・物理)

前半の数学の問題については、高得点の答案が多く、満点の答案も目立った。後半の物理(電気回路)の問題は正解率が低く、直流回路の基礎を十分に習得していない傾向が見られた。とくに、静電エネルギーの最大値を正しく答えている答案はほとんどなかった。

第5問 (物理・化学)

基礎的知識を駆使できる力を確認する問題であったので、知識を体系化して利用できる能力を有している受験生にとっては、難しくなかったようである。

その中で、陽極と陰極を取り違えたり、単純な割り算で小数点を打ち間違えたり、電荷の数を合わせていない反応式というようなケアレスミスが目立った。

また、時間変化を問う問題では学校での化学実験の際の観察経験に基づく思考力が効いたと思える。

● 国際環境工学部情報メディア工学科 後期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学A，数学Bの基礎力を確認する問題で，次の内容を出題。2次関数のグラフ，対数関数の不等式，定積分，反復試行の確率，空間内の一直線上の3点。

第2問（数学）

2次方程式の解と係数の関係，解の存在範囲に関する条件を問う基礎問題，および，閉区間における分数関数の最小値を問う応用問題。

第3問（物理）

斜面上をすべる物体の運動とエネルギー，および，物体系の運動量保存の法則などの理解度を問う。

第4問（数学・物理）

前半は，相加平均と相乗平均の大小関係を用いて，分数関数の最大値・最小値を問う基礎問題。後半は，電池，抵抗，コンデンサーからなる回路の電流，電圧などを問う基礎問題で，とくに，静電エネルギーの最大値を求めるために，前半の結果を応用できるかを確認する。

第5問 選択問題A（化学）

有機化合物の物質量および分子式の求め方，ならびに特定の化学反応から予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第5問 選択問題B（物理・化学）

硫酸銅溶液の電気分解を事例として，電極反応で生じる様々な化学反応（金属析出，気体発生）について説明させ，生成物の物質量を求めさせる。次に生成する気体をさらに反応させた場合，どのような現象が起きるか，グラフを用いて定量的に考察させる問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

基本的な問題であるため，全般的に正答率が高い。(1)の放物線の移動の問題に関しては，平行移動しただけの答案（y軸に関する対称移動をしていない）が多数見受けられた。小問別では，(2)の正答率が最も低かった。

第2問（数学）

小問の正解率は，(1) 高い，(2) やや低い，(3) 低い，であった。各小問は独立に答えられるので，(2)を答えずに，(3)を答えて得点している答案も見られた。

(1) 満点の答案が多かった。

(2) 正しい答えを書いているが，答えを導く過程を正しく書けていない答案が目立った。

(3) 関数の最小値を正しい根拠に基づいて見つけている答案はほとんどなかった。

第3問（物理）

斜面上をすべる物体の運動を問う問題の基礎事項を問う問題の正答率は高かった。運動エネルギーの基本問題の正答率は高かったが，応用問題の正答率は低かった。物体系の運動量保存の法

則の基本的理解を問う問題の正答率は高かったが、物体の衝突後の運動を問う応用問題の正答率は低かった。

第4問（数学・物理）

前半の数学の問題については、高得点の答案が多く、満点の答案も目立った。後半の物理（電気回路）の問題は正解率が低く、直流回路の基礎を十分に習得していない傾向が見られた。とくに、静電エネルギーの最大値を正しく答えている答案はほとんどなかった。

第5問 選択問題A（化学）

問1：単純な計算ミスと考えられる解答が幾つか見られたが、正解率は比較的高かった。

問2：解答が不足している答案が多く見られ、正解率は問1と比較して低かった。

問3：構造を正確に記述できていない答案が多く見られ、問2と比較して正解率が低かった。

問4：正解率は高かった。しかし、反応に関しては理解をしているものの、用語を正しく使用することが出来ていない解答が多く見られた。

第5問 選択問題B（物理・化学）

基礎的知識を駆使できる力を確認する問題であったので、知識を体系化して利用できる能力を有している受験生にとっては、難しくなかったようである。

その中で、陽極と陰極を取り違えたり、単純な割り算で小数点を打ち間違えたり、電荷の数を合わせていない反応式というようなケアレスミスが目立った。

また、時間変化を問う問題では学校での化学実験の際の観察経験に基づく思考力が効いたと思える。

● 国際環境工学部建築デザイン学科 後期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学A，数学Bの基礎力を確認する問題で、次の内容を出題．2次関数のグラフ，対数関数の不等式，定積分，反復試行の確率，空間内の一直線上の3点．

第2問（化学）

有機化合物の物質量および分子式の求め方、ならびに特定の化学反応から予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第3問（物理）

斜面上をすべる物体の運動とエネルギー、および、物体系の運動量保存の法則などの理解度を問う。

第4問 選択問題A（数学・物理）

前半は、相加平均と相乗平均の大小関係を用いて、分数関数の最大値・最小値を問う基礎問題。後半は、電池，抵抗，コンデンサーからなる回路の電流，電圧などを問う基礎問題で，とくに，静電エネルギーの最大値を求めるために，前半の結果を応用できるかを確認する。

第4問 選択問題B (物理・化学)

硫酸銅溶液の電気分解を事例として、電極反応で生じる様々な化学反応(金属析出、気体発生)について説明させ、生成物の物質量を求めさせる。次に生成する気体をさらに反応させた場合、どのような現象が起きるか、グラフを用いて定量的に考察させる問題である。

第4問 選択問題C (実技)

- (1) 立方体を切断した時にできる断面の線を問う基礎的な問題である。
- (2) 複合した立体の二次元図面を見て、三次元の立体として認識し、描けるかどうかを問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問 (数学)

基本的な問題であるため、全般的に正答率が高い。(1)の放物線の移動の問題に関しては、平行移動しただけの答案(y軸に関する対称移動をしていない)が多数見受けられた。小問別では、(2)の正答率が最も低かった。

第2問 (化学)

問1: 単純な計算ミスと考えられる解答が幾つか見られたが、正解率は比較的高かった。

問2: 解答が不足している答案が多く見られ、正解率は問1と比較して低かった。

問3: 構造を正確に記述できていない答案が多く見られ、問2と比較して正解率が低かった。

問4: 正解率は高かった。しかし、反応に関しては理解をしているものの、用語を正しく使用することが出来ていない解答が多く見られた。

第3問 (物理)

斜面上をすべる物体の運動を問う問題の基礎事項を問う問題の正答率は高かった。運動エネルギーの基本問題の正答率は高かったが、応用問題の正答率は低かった。物体系の運動量保存の法則の基本的理解を問う問題の正答率は高かったが、物体の衝突後の運動を問う応用問題の正答率は低かった。

第4問 選択問題A (数学・物理)

前半の数学の問題については、高得点の答案が多く、満点の答案も目立った。後半の物理(電気回路)の問題は正解率が低く、直流回路の基礎を十分に習得していない傾向が見られた。とくに、静電エネルギーの最大値を正しく答えている答案はほとんどなかった。

第4問 選択問題B (物理・化学)

基礎的知識を駆使できる力を確認する問題であったので、知識を体系化して利用できる能力を有している受験生にとっては、難しくなかったようである。

その中で、陽極と陰極を取り違えたり、単純な割り算で小数点を打ち間違えたり、電荷の数を合わせていない反応式というようなケアレスミスが目立った。

また、時間変化を問う問題では学校での化学実験の際の観察経験に基づく思考力が効いたと思える。

第4問 選択問題C (実技)

(1) 基礎的な問題のため正答率が高いが、上から見た図と横から見た図の相関性が良く理解できていない解答や切断面を全く理解できていない解答も見受けられた。

(2) 解答できている学生と解答できていない学生の差が顕著であった。複数の立体の位置関係等の全体像が把握できていても、各立方体の詳細部分を理解できていない事例も少なからず見受けられた。

● 国際環境工学部環境生命工学科 後期日程（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

第1問（数学）

数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学A，数学Bの基礎力を確認する問題で，次の内容を出題。2次関数のグラフ，対数関数の不等式，定積分，反復試行の確率，空間内の一直線上の3点。

第2問 選択問題A（生物）

DNAが遺伝子の実態であるという周知の事実が解明されるきっかけとなった実験を題材として，実験内容を科学的に正しく解釈する力を試す意図で作題した。知識を問うというより，目的とした結論に到達するためには，どのような実験を行い，どのような結果が得られればよいか，といった科学的思考の過程を正しく理解し，これを的確に記述できるかどうかを問う問題である。

第2問 選択問題B（生物）

「酵素」を題材に，アミノ酸およびタンパク質の特徴，酵素反応の特徴といった，生物の機能に関する基礎の理解力を問うことを意図としている。

問1,2：アミノ酸およびタンパク質の構成や特徴に関する問題。

3～7：カタラーゼを題材に，反応過程，反応速度，酵素活性に関する基礎が理解できているかを問う問題。

第2問 選択問題C（化学）

有機化合物の物質質量および分子式の求め方，ならびに特定の化学反応から予想される異性体の分子構造を答えさせる問題である。

第2問 選択問題D（化学）

密閉系での酸素と水素の燃焼反応を事例として，一般化学の知識ならびに気体の性質について答えさせる問題である。

第2問 選択問題E（化学・生物）

鎖式炭化水素の反応と，生成物が生体の中でどのように作用をするかについて基本的な理解力を問う複合問題である。

問1：鎖式炭化水素の反応に関する基本的な問題。

問2,3：基礎的な化学反応式が完成できるかを問う問題。

問4,5：嫌気呼吸の意味を理解し，得られたエタノール量からグルコース量が算出できるかを計算させる問題。

問6,7：植物ホルモンの基礎的な作用について理解できているかを問う問題。

第2問 選択問題F（物理）

物体の直線運動や音のうなりなどの理解度を問う。

第2問 選択問題G（物理・化学）

硫酸銅溶液の電気分解を事例として，電極反応で生じる様々な化学反応（金属析出，気体発生）について説明させ，生成物の物質質量を求めさせる。次に生成する気体をさらに反応させた場合，どのような現象が起きるか，グラフを用いて定量的に考察させる問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

基本的な問題であるため，全般的に正答率が高い。(1)の放物線の移動の問題に関しては，平行移動しただけの答案（y軸に関する対称移動をしていない）が多数見受けられた。小問別では，(2)の正答率が最も低かった。

第2問 選択問題A（生物）

問1は基本知識を問う問題で正解率が高かった。問2～5は記述式であったため，最初の問いには正解でも，その理由の説明にこの分野の内容を理解していないと思われる回答が目立ち，正

解率が低かった。

第2問 選択問題B (生物)

酵素反応に関する基礎的な出題であったが、全問正解者はいなかった。生物や化学の教科書に出ている用語、及び基礎的な内容について、全て理解していなければ合格ライン到達は難しいであろう。

問1：酵素反応、タンパク質に関する基本事項を問う問題であった。全問正解者は極わずかであった。用語を正確に答えられるようにしてほしい。

問2：ペプチド結合の構造式を示す極めて基本的な問題であったが、正解者は半分程度であった。

問3：過酸化水素の分解反応式を問う、基本問題である。これも正解者は半分程度であった。

問4：典型的な酵素名について問う問題であったが、7割程度の正解率であった。

問5,6：酵素の失活、ならびに反応速度の低下を、実験から考察する記述問題である。6割程度の正解率であった。

問7：酵素反応の初期速度を答える問題である。初期速度が、グラフの原点における接線の傾きであることに気がつけば極めて容易であるが、正解者は数人であった。

第2問 選択問題C (化学)

問1：単純な計算ミスと考えられる解答が幾つか見られたが、正解率は比較的高かった。

問2：解答が不足している答案が多く見られ、正解率は問1と比較して低かった。

問3：構造を正確に記述できていない答案が多く見られ、問2と比較して正解率が低かった。

問4：正解率は高かった。しかし、反応に関しては理解をしているものの、用語を正しく使用することが出来ていない解答が多く見られた。

第2問 選択問題D (化学)

1 計算間違いや有効数字間違いなど、単純な間違いが多かった。

(第3問の問3)

2 知識を問う問題や定型的な問題の正解率は高かった。

(問1のイ、ウ、エなど)

3 応用問題、ちょっとひねった問題の正解率は、非常に低かった

(第3問の問1のカ、及び問4)

第2問 選択問題E (化学・生物)

簡単な有機化合物の反応経路について出題をしたが、完答していた受験生はほとんどいなかった。また問2では化学反応式をきちんと立てることができない受験生が目立ち、また問4の量論関係からグルコース量を求める問題についても正答率は低かった。植物ホルモンの作用については概ね正答していた。

第2問 選択問題F (物理)

物体の直線運動の基本的理解を問う基礎問題の正答率は高かったが、走行距離、所要時間等を問う応用問題の正答率はやや低かった。物体運動の計算問題の正答率は高かったが、音のうなりを問う問題の正答率は低かった。

第2問 選択問題G (物理・化学)

基礎的知識を駆使できる力を確認する問題であったので、知識を体系化して利用できる能力を有している受験生にとっては、難しくなかったようである。

その中で、陽極と陰極を取り違えたり、単純な割り算で小数点を打ち間違えたり、電荷の数を合わせていない反応式というようなケアレスミスが目立った。

また、時間変化を問う問題では学校での化学実験の際の観察経験に基づく思考力が効いたと思える。

平成 20 年度入試の出題意図、採点総評 《推薦入試》

● 外国語学部英米学科 推薦入試（面接）

<出題の意図・ねらい>

全国推薦（英語による面接）

英語の運用能力、特に理論的な英語表現力をみることに主眼を置き、英米学科での勉学の適正にかなう者を選抜する。

地域推薦（面接）

限られた時間の中で、どの程度積極的に自分の意見を述べているか、豊かな知識を持って理論的に意見を述べているか、相手の意見を理解した上で議論を進めているか、議論をリードし、調整するリーダーシップがあるか、といった点を勘案し評価の基準とする。

● 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

気候変動は、現在、国際社会が直面する最重要課題のひとつであるが、その協議のやり方については、安全保障理事会が主導して政府間コンセンサスを形成する役割を果たすのか、それとも国連総会で議論するののかについて意見が分かれている。

この問題は、BBC ニュースの英文をまず読んで気候変動の問題の重要性を理解すること、さらに、日本語の資料と表を理解した上で、受験生自身の考え方を述べることを求めている。受験生には英語の読解力とともに、普段から気候変動というグローバルな問題に関心を持つことを希望している。

<答案の特徴と傾向>

【問 1】

・規定の分量（500 字以上）に満たない受験生が一割いた。また、句読点・数字は一字と数える、といった答案用紙の書き方についての指示も守られていないケースが目立った。

・総じて、受験者は課題文の読み取りに苦労していたようである。気候変動を、国連総会でも経済社会理事会でもなく、安全保障理事会で取り上げることについての是非を巡る議論であることを、課題文から適切に読み取れていない受験者が多かった。高校生にとって、気候変動というテーマ、あるいは国連の機関そのものに馴染みがない為か、または英文の難易度が高かった為か、課題文の要約ではなく、受験生の意見が混じり、完全に創作となっている答案すら若干散見された。

・要約で要求されるのは、課題文（英文）の読解力だけでなく、そこから重要な点をピックアップして簡潔に文章にまとめる能力であるが、受験者は最初の読み取りの点で既に苦労しているようであった。日頃からニュースなどで世界情勢に目を配り、英語力を身に付け、様々な分野の本を読んで日本語の文章力や思考力を鍛える機会を、受験者はそれほど多く持っていないのではないかと思われる。大学に入って以降、そのような機会を積極的に持つことを期待したい。

【問 2】

問 2 は、「気候変動問題を国連安全保障理事会で議論すること」に対する賛成意見と反対意見をまとめ、その上で、受験生自身の意見を問うものであった。この議題に関して課題文は反対の論調であり、資料 1 は賛成の立場からの見解であった。

・問いの文章で「問題文および以下の資料を参考に、賛成、反対それぞれの意見を簡潔にまとめた上で」と明示しているにもかかわらず、この要件を満たしていない答案、すなわち受験生が賛同する意見のみについて論述している答案が少なからず見受けられた。

・議題そのものに関して、賛成意見についてはその根拠を十分に理解している答案も見られたが、反対意見については、気候変動問題を単純に「先進国」と「発展途上国」の対立として捉えるなど、十分に問題を理解していない答案も多く、それは受験生の課題文(英文)に対する読解力が反映しているものと思われる。

・「国連の安全保障理事会」で議論することの是非について問うているにもかかわらず、「国連」での議論と同じものとして理解していると思われる答案や、「安全保障理事会」が「先進国」で構成されているとの誤解の上に回答している答案も散見された。(二酸化炭素排出量の国別割合を示した) 資料 2 から、安全保障理事会の常任理事国による二酸化炭素排出量が世界の半分以上を占めているというデータを読み取り、自らの主張に有効に活用した答案は 1 割程度であった。

● 経済学部 推薦入試 (小論文)

<出題の意図・ねらい>

「格差と貧困」という話題のテーマを、ふたつの文章を利用して出題した。

ひとつは、『ワーキング・プア』というテーマで放送されたテレビ番組を文章化したもの。もうひとつは、この「格差と貧困」を扱ったいわゆる研究者による文章である。

戦後の一時期を除けば、貧困という問題は、過去のものとしてきた。しかし、若い層・老人を中心に今や深刻な問題となっている。また、格差はともかくとして、貧困という問題は存在しないという議論も強い。さらに貧困という問題を、「自己責任」論(それはどこまでいっても自分の責任)にひきつけて解消しようとする論調も強い。

そこで出題に際しては、こうした現在の経済社会状況を受験生がどのようにとらえるのだろうかという問題関心および文章作成力・論理展開力をみるために問題を設定した。

設問 1 と 2 は、ふたつの文章を読み込めば、比較的容易に解答できる程度の設問とした。文意を正確に読み取る読解力とともに、主旨を簡潔に要約する能力を測ることを目的とした。

設問 3 では、ふたつの課題文を手がかりに、はたして貧困を自己責任へと解消できるのだろうかということの論理展開力をみることを中心として出題した。受験生の考えを論理的に組み立てる能力と、その結果を相手にわかりやすく伝える、受験者の説明能力を測ることを目的とした。

<答案の特徴と傾向>

① (設問 1 と設問 2 について)

設問 1 については、約 6 割の受験生がほぼ正確に解答した。設問 2 については、出題者の意図に反して、解答にバラツキがあった。社会保障制度に関わる内容であったために、受験生が難しく考えたためであろう。何故、社会的なセーフティネット(人々の最低限の生活を守るクッションのようなもの)が存在するのかについての関心が薄い。

②（設問3について）

率直なところ、評価に値する解答はきわめて少なかった。これは今の受験生の社会への問題関心を勘案するとやむをえないところもあると考えられる。ふたつの課題文を手がかりに、はたして貧困を自己責任へと解消できるのだろうかというものの論理展開力をみることを主眼に出題したが、課題文をまとめるのに精一杯の解答が多かった。また、自分の考えを示さず、受験生個人が経験した具体例のみを紹介する解答なども多かった。出題の意図を十分に汲み取ることや、自分の結論を明確に示すことなど、受験者の、小論文課題に対する基礎力の向上が求められよう。

また最近の傾向として解答欄の文章（文字）が、いわゆる「丸文字」・「極端に小さい字の解答」・「極端な当て字」、そして「おそらく本人の意図に反しての乱雑な字」が多い。

● 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

[問題Ⅰ]

問1、問2、問3

平易な英語で書かれたエッセイの論点を、比較的長めの規定の字数内に要約させる設問により、受験生の英文読解力、英語の語彙力、日本語の文章力を問うた。

問4

問題文の提案に対する受験生のアイディアを英語で書かせる設問により、受験生の英語の語彙力、英文構成能力、英文法に関する習熟度、自分の意見を述べる能力および発想力を問うた。

[問題Ⅱ]

異文化理解の文章を読み、オリエンタリズム的な立場の意味、オリエンタリズム的視点が生じた原因、異文化理解を深めるにはどうすればいいかを問う論述問題を出題した。

比較文化学科で学ぶ上で、異文化へのアプローチ方法に関する理解力があるかどうか、さらに自らの意見や問題意識を持ち、それを表現する文章力があるかどうか判定することを意図した。

<答案の特徴と傾向>

[問題Ⅰ]

問1

筆者が現在行っている活動の契機となった体験は、比較的平易な英文で綴られているが、全般的に、ボランティア活動を通じ目の不自由な子どもとの接触に関わる叙述が長すぎる。

たとえば、会話のやり取りがそのまま翻訳されている答案が目立つ。またとくに、なぜ筆者がボランティアの道へ進んだのかという決定的な体験、すなわち目の不自由な子どもに「赤」を教えるのに「トマト」と引き合いにだしたこと、彼らへの配慮のなさをボランティアのリーダーに指摘されたこと、そのことを実感したこと、以上が簡潔にまとめられていなかった。

言葉の問題として、「ボランティア」と「チャリティ」の語彙の乱用がかなり見受けられる。

問2

筆者が現在行っている活動は問題文中に複数述べられているが、その内の一部しか解答に含めていない答案が目立った。また、“come back home,” “ask for” の誤訳も非常に多く認められた。また、文法的な誤りを含む、不自然な日本語で書かれた答案も、散見した。

問 3

問いの意味は比較的良好に理解されていた。しかし、具体的に答えていない答案や数字の間違いなどが目立った。

問 4

文法： 助動詞の後が名詞になっていたり、三単現の S がついていなかったり……といったような、中学生レベルの基本的な文法上のミスが目立った。スペルミスも多かった。

量： 10 行の解答欄があるにもかかわらず、数行しか書いていないものが多かった。最低 8 割程度は書いてほしいものである。

内容： 独創的な発想の答案が少なかった。問題の英文から取ってきた表現をそのまま用いているものもあったが、自分なりの英語で、言いたいことを伝える努力をしてほしい。

全体的にみて、点数に大きな差がついた。

【問題Ⅱ】

問 1

「オリエンタリズム」の意味については、ほとんどの学生がおよその理解に達していたように思える。ただ、この言葉がサイード著『オリエンタリズム』発刊が契機となり、現代を解くキーワード化したことが問題文中に記されていたため、西欧から中東、アフリカを見る場合に限られた侮蔑の表現としてのみ記述した答案が多く、近代化の達成の度合いの点で優劣差がある社会や国の間でも広く用いられる表現になっていることに触れた解答が少なかった。このことは、多くの答案が、問題文中の語句だけを組み合わせる文章を作り、自分なりの表現が見られなかった点にもうかがえる。

問 2

本文で述べられた内容を要約する問題であるが、自分の頭の中でまとめることなく、本文の文章を単に継ぎはぎして作成した答案が多かった。

問 3

大多数の解答は、本文の内容の理解はできているものの、それを踏まえて自分なりの実践例を考えて織り込むには到っていなかった。

また、異文化を知る前にまず自文化を知らねばならないという答え方をしている例が多かったが、自文化を理解させる、理解してもらう、ことばかりを意識しているものと、自文化を深く知ることによって、結果的に自文化が異文化との接触の中で形成されてきたことに気づくはずだと展開されているものとに分かれた。当然前者には高い評価は与えられていない。

ほかには、教育制度を変えなければならないといった、「自分が」どうすればいいかには触れない答え方も目立ったが、これにも高い評価は与えられていない。

● 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

文献を読んで理解し、時分なりの考察を加えた上で他者に伝える能力は、大学における教育や研究にはもちろん、社会でも必要な能力である。この試験では、この能力を測ることを目的としている。

例年、本学科の小論文のテーマは、本学科の教育内容に関連するものが選択されることが多いが、今回は人間の発達をテーマとした。人間の発達には、人間が社会性を獲得していく過程が重要であることは一般的にいわれるが、一方で、孤独でいるときにある種の発達があるという指摘もある。設問では、これらを和文と英文の二つの文献で提示し、それらを理解した上で受験者の考えを小論文としてまとめることを求めている。問1と問2は文章の理解力を、問3は考えをまとめる能力をみるのがねらいである。

<答案の特徴と傾向>

問1

筆者が意図している孤独の時間の効用についての主張を完全に反対に取った以下のような解答が多かった。

- 社会科学が孤独を作り出している。
- 社会科学が他者との交流を持たない人間を救っていない。
- 他者という時間をもっと大切にすべきなのに、社会科学がそれを救っていない。

また、英文の訳をそのまま書いたため、日本語として意味がとれないものも多かった。英文を正しく読み取ることができたかどうかで点数に差が出たようだ。

問2

文章1中の「Devine Plus」の意味を説明する問である。この問では受験者が考える具体的な例を挙げて説明するよう求めているが、この「Devine Plus」が発揮されると思われる例も多数挙げられており、多くの受験者は、文章1が指摘する「Devine Plus」の力を無意識のうちに享受した経験があるのかもしれないという印象を持った。しかしながら、提示文を十分に読みこなせないためか、あるいは、発達に関して一般的にいわれる説に引きずられてか、全く逆の説明になっている回答が多数みられた。

問3

提示された二つの文章を理解した上で、受験者の考えをまとめる問である。英文が難しかったのか、文章1を論理に取り込まず、文章2の論点に準拠して論述されているものが多かった。そのため、「人と社会の関係」、「異文化理解」、「共生」などを取り上げて論じたものもみられた。また、個人と社会の関係性について、プライベートなエピソードを引用する例がみられたが、その多くが一般論化できずに終わってしまう傾向があり、有効なエピソードの引用が台無しになっているのは残念であった。

問題文では、「人間の発達について・・・」となっているが、この発達という言葉は、やや専門的であるので、提示文の中で、その意味は推測できるものの、正しく理解できなかった受験者もいたかもしれない。一般的な言葉で「個人の成長について・・・」としたほうが、より正しく理解されたかと思われることは、出題側の反省点である。もちろん、多くの受験者は正しく理解して解答している。

● 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

出題文の出典は、山岸俊男著『社会的ジレンマ 「環境破壊」から「いじめ」まで』（PHP 新書、2000年）である。現代社会は、規模の経済性、集積の効率性により、社会の構造の大規模化、都市化、移動化を特徴とするものに変化してきた。このような変化が、人々の関係や個々人の行動・価値判断に影響を与え、また、社会も共同体から匿名性の高いものに変えたほか、個々人の存在意識や行動の責任を見えないものにしたともいえる。このような現象は、日本を始め、多くの社会で様々な問題を引き起こしている。

このような問題意識から、本出題では、「個人・社会（集団）・政府の関係」、個々人の行動が、「単なる個人」の行動にとどまらず、社会にどのように影響を与えているのかについて、受験生に考えさせることを出題の意図とした。個々人が自分の利益や都合だけを考えて行動した結果、社会が望ましくない状態（社会的ジレンマ）に陥ってしまう。特に、多くの社会問題が、相互不信や共同体の崩壊などに起因するため、個人・社会・政府の原点に戻り、匿名化が加速されている情報社会と個人、個々人の行動と社会損得との関係について考えてみることをねらいとした。

「社会的ジレンマ」のような様態は、イソップのねずみたちの愚話に例えることができる。ねずみたちは猫に鈴をつければいいと知っているものの、誰かほかのねずみが猫に鈴をつけてくれることを望むばかりで、結局、望ましい社会状態を達成できない。このことは、個々人が、「分かっちゃいるけどやめられない」という状態を生じさせ、このような行動が社会に何らかの影響を与えてしまうということを意味する。マイカー通勤をやめてバスで通うことが温暖化防止に望ましいと知っていても、誰かほかの人がやってくれることを望む。また、自分ひとりがバス通勤したからといって温暖化防止になるわけではない。だからマイカー通勤をやめない。このような個人の行動においては、社会としての損得勘定や利他主義が働かず、近視眼的利己主義が支配する。

社会的ジレンマを解決するために使われる「アメとムチ」は、問題をたんに先送りにしてしまう。「アメとムチ」は、人々の自発性を薄めていくうえに、人々を動かすためにより強力な「アメとムチ」を必要とする悪循環を生じさせる。したがって、お互いの顔が見え、社会と協力し、信頼関係を保ち、社会的ジレンマを解決するためには、人々の自発性を引き出すこと、コミュニケーション、共同体などが大事である。出題文は、このような著者の考えを集約した部分（第3章 不信のジレンマと安心の保証）から抜き出したものである。

本問は、著者のいう「個人の損得勘定」と「集団・社会としての損得」の関係について把握した上で、出題文に示された筆者の「社会的ジレンマ」の解決策として「アメとムチ」を用いることの是非、また、その論じ方と事例への応用力を問うものである。

<答案の特徴と傾向>

設問は、「筆者の見解をふまえた上で」、自らの考えを述べることを要求していた。しかしながら、答案のなかには、筆者の見解をきちんと理解することなく、それとは無関係に一方的に自らの考えを論じるのみに終始しているものが散見された。とはいえ、逆に、筆者の見解を理解した上で自らの考えをきちんと論じている答案も、少なからず見られた。その意味では、筆者の見解をふまえることができた答案と、ふまえることができなかった答案とに、答案は二極化していたと言えることができる。

出題文については、文章表現そのものは難しくはないものの、内容の面では、「社会的ジレンマ」・「二次的ジレンマ」や「内的帰属」・「外的帰属」といった諸概念間の関係を把握するという点において、受験生にとっては読み解くことが難しいのではないかと、出題者の側ではある程度の予想をしていた。そのうえで、あえて受験生の読解力を問う出題文を用意した。にもかかわらず、出題者の予想よりは比較的多くの答案が、出題文の内容をきちんと読み解くことができているように見受けられた。

また、出題文中において筆者は、「社会的ジレンマ」を解決するために「アメとムチ」を用いることの問題性を指摘し、そうした手法に対して批判的に論じていた。そのため、そのような筆者の見解に追随した方向性の答案が多く見られるであろうと、出題者の側では予想していた。しかし実際には、筆者の見解とは逆に、「アメとムチ」という手法を使うことに対して肯定的な見解を示す答案が、予想よりは多く見られた。ただし、そのなかには、筆者の見解に一応の反論をすることができている答案と、逆に「アメとムチ」という手法に対する筆者の批判的視点をふまえることができずに、安易にその手法への賛成の意を表明するにとどまっている答案との二つの種類の答案があった。この両者を比べると、前者の答案の方が、後者の答案よりは、より高い評価を得ることができたことは言うまでもない。

総じて言えば、筆者の見解に賛成するか否かにかかわらず、筆者の見解をふまえ、筆者の意見と自分の意見をきちんと区別しつつ論じた答案は、概して高い評価を得ることができたと言える。

● 国際環境工学部エネルギー循環化学科 推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

第1問 化学とエネルギー環境の関連についての理解度と考察能力を観る。

第2問 不飽和炭化水素に代表されるアセチレンの多様な反応性と化学構造、同位体について理解しているかを観る。

<答案の特徴と傾向>

第1問

比較的良く問題を把握している答案が多かった。特に化石燃料と温暖化についての関連はマスコミでもしばしば取り上げられるせいか、総体的な理解度は高かった。しかし、その他のエネルギーと環境との関連性については、必ずしも高いとはいえない。

第2問

問1 有機化学の合成と化学構造、命名法を理解しているかを問う問題であったが、十分理解できていると思われる答案が多かった。

問2 水の同位体の化学構造や分子量の計算に十分な理解があった。

（面接）

<面接内容>

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物・その他、の各項目について評価した。

本学を選んだ理由（志望動機）、高校で力を入れて取り組んだこと、本学で学びたいこと、将来何をやりたいか、を共通項目として、各自にまず自己 PR をさせた。その後、化学や環境に係る基礎的な質問や自己 PR 内容に関する質問などを行って、各自の基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物・その他の項目について評価した。

<感想>

意欲と人物・その他の評価項目に関しては概ね良好であったが、コミュニケーション能力に欠ける受験生が数名あった。また、基礎学力に関しては、不足している受験生が目立った。

共通の質問項目については、各自共準備をしていたと思われ、概ね良好であり、特段の優劣はなかった。総じて、まじめさや意欲に関してはほぼ全員から感じることができた。しかし、予測されていない後段の質問では、基礎学力やコミュニケーション能力に疑問が残る受験生が数名見られたものの、入学してほしくないというほどのレベルではない。

● 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

<出題の意図とねらい>

本学科における専門教育の基礎となる学習が、これまでの学習成果を相互に関連付けて十分なされてきたかどうかを、物理、数学に関する表現を通して問う問題である。そのため、記述解答形式として、考え方を表現できるようにしている。文章を読み、設問の意味を理解し、解を導くのにどのようなアプローチをするのか、また、その過程が正しく、かつ、分かりやすく表現できているかなど、設問を含む問題全体を通して、基礎学力、応用力、読解力、表現力などを評価する総合問題として構成されている。

<答案の特徴と傾向>

「学習内容の融合的応用力」、「公式の適用で解答に達するものの、解答に達する過程の説明・表現力」、「物理現象とその数学的表現の理解力」などが十分とは言い難く、物理現象の数学的記述にも不十分さが感じられた。

（面接）

<面接の形態>

全国推薦・受験生 8 名および社会人特別選抜・受験生 1 名について、一人 10～15 分間の個人面接を実施した。

<面接内容と出題の意図>

設問 1 志望目的に関する質問

環境機械システム工学科を志望する目的、何を学びたいか、自分の将来の進路などについて質問し、学科についてどの程度理解しているのか、入学した場合の学科への適合性などを見極める内容としている。

設問 2 物理についての質問

機械工学を学ぶ上で、物理の 2 つの分野についてどの程度正確に理解しているかを問う問題について、パネルを利用した質問および口頭による質問を実施した。

<感想>

設問 1 ほとんどの受験生は、オープンキャンパスへの参加やホームページによる知識を披露し、本学科への志望を述べる受験生が多く、事前に準備していることが分かった。将来の進路については自動車分野を希望する受験生が多かった。

設問 2 基礎的な問題については、丸暗記した公式を答える学生が多く、公式を導出する際の考え方についての質問に答えられない学生もいた。2 つの質問により、学力の判別と同時に問題解決に取り組む意欲の有無が評価できた。

● 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

<出題の意図とねらい>

高校で使用している教科書の演習問題程度の平易で基礎的な問題を出題した。

第1問では、3角関数のグラフ、周期といった基本的な問題ができるか、3角関数の方程式を解くことができるかを問うた。

第2問では、楕円のグラフ、楕円と直線との交点の midpoint の軌跡を求めさせた。

第3問は、力の分解と合成およびつりあいに関する力学の基本問題である。

第4問は、電流の定義に関する電気の基本問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問：3角関数のグラフが描けないもの、周期が求められないものが散見された。

第2問： midpoint の軌跡までたどり着いた答案がほとんどなかった。

第3問：非常に基本的な問題であるにもかかわらず、不正解が少なくなかった。

第4問：与えられた数値を適当にかけたり割ったりしただけの不可解な回答も少なくなかった。

（面接）

<内容>

なぜ本学科を志願したか、入学してから何を学びたいか、目標はあるか、などの質問に答えてもらった。また、物理Ⅱを学習しているか否かを確認した。

さらに、数学/物理の基礎学力を確認するため、2、3題の基礎的な問題に解答してもらった。

<感想>

質問への答えは、暗記してきた内容をそのまま話しているような回答もあったが、すべての受験生に対して、本学科で学びたいという意欲を感じ取れた。

また、大半の受験生に対して、数学の基礎学力を認めることができた。

● 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

<出題の意図とねらい>

第1問

問1 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を述べているかを問う問題である。

問2 問1で自ら述べた見解にそって、自らの提案を自分なりに図解しようとしているか、題意にそった回答をしているかを問う問題である。

第2問

問1, 問2 基礎的な定積分の計算を行う問題で、数学の最低限の計算力をみた。

問3, 問4 数学において単なる計算力を問う問題でなく、数学における式の定義や、式が何を意味しているか、を理解しているかどうかをみた。

- 問 5 簡単な物理の問題（力のつりあい）であり，角度の単位，三角形の内角の関係，力のつりあいを理解しているかどうかをみた．

第 3 問

- 問 1, 問 2 熱容量に関する物理的な理解度や計算力を確認する問題である．建築的な要素を取り入れることで，これまで受験生が体験した温熱環境と物理的な法則の対応関係を正しく整理できているかも確認する．
- 問 3, 問 4 問 2 の発展的な問題として，熱容量の理解に対する応用力，物理現象の本質を見抜く力，論理的な思考能力等を問う問題である．

<答案の特徴と傾向>

第 1 問

- 問 1 基本的な見解は述べられていたが，文章としての論理的整合性のおかしいものも散見された．また問題の文章をよく読んでいないと考えられる回答もあった．
- 問 2 おおむね題意にそって回答されていたが，問題の基本的条件を無視しているものも散見された．

第 2 問

- 問 1, 問 2 ほとんどの受験生ができていたが，全然できていない基礎的な計算力のない受験生も 2 割程度いた．
- 問 3, 問 4 多くの受験生ができていなかった．計算の仕方を記憶しているだけで，基本的な式の意味を理解していない受験生が多い．
- 問 5 単位をラジアンと指定しているのに無視した受験生や，正しいつりあいの式をかけない受験生が多かった．

第 3 問

- 問 1, 問 2 正答率が高く，熱容量に関する理解度は高いようであった．
- 問 3, 問 4 正答率はあまり高くない．題意とは直接的には関係の無い考察や単に建築に関する知見を答えている受験生が多かった．

(面接)

<実施方法等>

3 名を 1 グループにして 30 分程度の面接を行った。

- ・本学科の教育目的・内容の理解度および学科への適合性を確認するための質問
- ・「建築」に対する興味や意識の高さを確認するための質問
- ・環境問題への関心の深さを聞くための質問
- ・高校生活の充実度や実績・積極性に関する質問
- ・将来への展望に関する質問などに対し、回答を求めた。

<感想>

学科の特徴やカリキュラム内容については，ホームページおよびパンフレットによって詳しい情報を入手していた。また，オープンキャンパスや模擬授業に参加している受験生も多く，ほぼ全員から本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。「建築」に対する興味と、コミュニケーション能力に関しては受験生の間で差が見られた。

● 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

- 第1問 環境に関する時事問題として、地球温暖化問題に関する一般常識を問う問題や、メカニズムを論理的に説明できるかを評価する問題である。
- 第2A問 セッケンを題材として化学分野の基礎知識を問う問題である。油脂の構造を理解し、計算が正しくできるかどうかを評価する。
- 第2B問 レタス種子の発芽を題材として生物分野の基礎知識を問う問題である。植物の花芽形成について正しく理解できているかどうか、また実験の内容をよく理解し、論理的に説明できるかを評価する問題である。
- 第2C問 気体の状態変化に関する実験を題材として、物理分野の基礎知識を問う問題である。気体の状態を正しく理解し、論理的に説明できるかを評価する問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

温室効果ガスを挙げることができた受験生は多かったが、温室効果ガスによって地表面の温度が上昇するメカニズムについて、論理的に説明のできた答案はほとんどなかった。

第2A問

概ね良くできていたが、油脂の構造を理解していないため、平均分子量について答えられなかった答案が目立った。

第2B問

単に暗記するだけでなく実験の内容をよく理解し、論理的に説明しなければならないため、問題の難易度は比較的高かったが、非常に良くできていた。

第2C問

概ね良くできていたが、気体分子の運動の変化と気体の体積変化の関係についてきちんと説明ができた答案は少なかった。

（面接）

<面接内容>

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物・その他の各項目について、1人10～15分間の個人面接を実施した。

<感想>

人物に関しては概ね良好であったが、なぜ本学を志望したのか、きちんと説明ができなかった受験生が数名あった。また、基礎学力に関しては、著しく不足している受験生が目立った。